

第 2 部 競技種目毎のルール

9 スピード

概説

9.1 形式

スピード競技会は：

- A) 以下の条件の下に実施するものとする。
- 1) IFSC スピードライセンスルールで定められた仕様に沿って設計された人工構造物の使用。
 - 2) IFSC によって承認された自動計時システムの使用。
 - 3) 選手が IFSC 公認自動ビレイシステムによって上部から確保されていること。

例外的な状況では、ジューリ・プレジデントはその代替としてクライミング・レーンの横に配置した 2 名のビレイヤーによって地上から操作されたトップロープを使用することを要求することができる。

世界選手権等の IFSC が公認する国際大会におけるスピード競技では、全ての大会の全てのラウンドで同一仕様のクライミング・ウォール (P.13) に設定された同一のルート (P.15) が使用され、使用されるホールドも Hand (右上)、Foot (右下) の 2 種類のみ。それを取付ける位置や向きも細かく指定されています。選手の安全確保も、現在ではオートビレイシステムの使用が原則となっています。

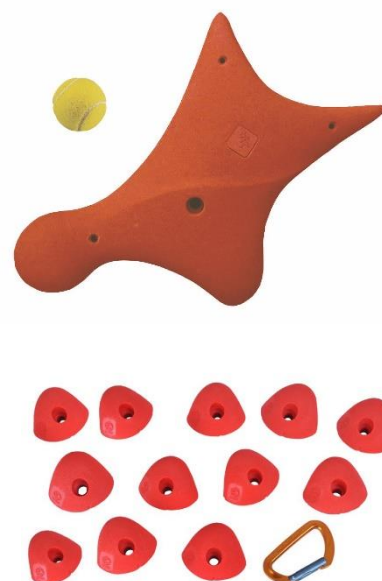
クライミングウォールやホールド、その他計器類も含めた規格を定めた文書が“IFSC スピードライセンスルール”です。

他の種目では、ルールの中にある程度具体的なクライミング・ウォールのスケールや安全性の確保に関する記述が見られます。スピードでも 2018 年まではそうした内容がルール中に記述されていましたが、2019 年からはそうしたことがらすべて省略された形になっています。選手の安全確保についても 9.1 A) 3)に「選手が IFSC 公認自動ビレイシステムによって上部から確保されていること」という記述と 9.4 の選手のハーネスに関する記述があるのみです。

クライミング・ウォールや使用されるデバイスの詳細は、“IFSC スピードライセンスルール”に全て委ねるという考え方でしょう。その一方で、現時点（2019 年 8 月）では、“IFSC スピードライセンスルール”を IFSC のサイトから参照することはできないようです。

なお最後にある「2 名のビレイヤーによって地上から操作された、トップロープ」は、2018.年のルールでは「クラシック・ビレイ」として以下のように規定されていました。

- 8.3.3 a) クラシック・ビレイ：クライミングロープはディビエーション・ポイントとトップ・プロテクションポイントに、縫製によるテープスリングと規格に則ったクイック・リンク（マイロン・ラピッド）で確保支点に固



定されたステンレス製の安全環付カラビナを用いて設置されねばならない。

この場合は選手 1 名のビレイを 2 名のビレイヤーでおこないます。ハーネスとビレイデバイスを着用したビレイヤーがクライマー側のロープを引き、もう 1 名のビレイヤーが制動側のロープを引く、というかたちです。スピードの選手は 5~6 秒台で 15m のウォールを登っていくわけですから、このように 2 名体制でビレイを行う必要があります。

このクラシック・ビレイのみを用いて従来スピード競技は行われていましたが、2016 年よりオート・ビレイに関する規定が加わりました。これは、クラシック・ビレイではビレイヤーの技量によって競技に支障が出ることも多かったために、より高い競技性を持たせるための改正といえるでしょう。そして現在では原則オート・ビレイです。

その背景には、オート・ビレイ器そのものの進歩があると考えられます。つまりアテンプト中の選手に影響を与えるようなテンションがかからず、同時にスピード競技選手の登りに追隨してウエビングを巻き上げていくという、技術的には相反する要求を満たす器具が登場した、ということでしょう。ただ使用するオート・ビレイシステムのメーカー、機種まで別文書で指定されており、共通規則 3.5 の用具に関する CE 規格リストにオート・ビレイシステムが含まれていません。これは現状では、競技に使用しうる仕様を備えたシステムが極めて限られている、ということでしょう。

B) 以下のように構成されるものとする。

- 1) 選手が 2 人一組となって、左側が「A」、右側が「B」とされた 2 つのレーンを登攀する単一のステージで構成される予選ラウンド。
- 2) 予選ラウンドにおいて有効タイムを記録した選手数が 4 もしくはそれ以上の場合、2 から 4 の勝ち抜きステージで構成される決勝ラウンド。

C) 予選ラウンドに先立ちプラクティス・ピリオドを設けなければならない。プラクティス・ピリオドが設定される場合、このプラクティス・ピリオドの時間や方法はテクニカル・ミーティングで告知するものとする。

ラウンドの構成はリードやボルダリングとやや異なります。予選は 2 ルート同時進行なのでリードの予選と似た雰囲気ですが、決勝ラウンドはトーナメント方式で複数のステージに分かれています。9.1B) 2) で「2 から 4 の勝ち抜きステージ」とあるのは、予選を通過した人数によって決勝進出者数が変化するため、それに伴いステージの数も変わってくるからです。

9.2 IFSC は、次のカテゴリーに対して世界記録を公認する。

- A) 男子（競技会開催年に 16 歳もしくはそれ以上であること）
- B) 女子（競技会開催年に 16 歳もしくはそれ以上であること）

9.3 世界記録は以下の条件下でのみ成立させることができる：

- A) 競技会開始前にクライミング面とホールドが、IFSC テクニカル・デリゲイトによって承認され IFSC スピードライセンスルールに準拠していること。競技会主催者は、ジュリー・プレジデントに対し関連する IFSC ホモロゲーションレポートの写しを証明として提供するものとする。
- B) 使用する計時システムが IFSC によって認証され、世界記録への要件を充足していること。
- C) 競技会が公式 IFSC カレンダーに含まれていること。
- D) ジュリー・プレジデントが IFSC によって指名されていること。

共通規則の 3.21 に規定のある世界記録の認定についての詳細です。2018 年まではこの世界記録に関する規定はルールにはありませんでしたが、ここに加わりました。認定を厳密化するためでしょう。

安全性

9.4 各選手はハーネスを着用するものとする。ジャーリ・プレジデントは、選手のハーネスが安全でないと合理的に確信する場合、その選手の競技開始を許可しないものとする。

「安全性」というセクションにはこれしか記述がなく、2018年までに比べシンプルになっています。以前はリードと同じように、トップロープの選手への装着方法、ビレイヤーによるハーネスの装着状態やロープの取り付け状態の確認義務などの規定がありましたが、全て削除されています。オートビレイが原則となったためでしょう。

競技順及び定員

9.5 決勝ラウンドの定員は、次のように決定されるものとする：

予選における有効タイム保有選手数	決勝定員
4 - 7	4
8 - 15	8
> 15	16

スピード競技の大きな特徴の一つとして挙げられることは、決勝の定員が「予選で有効なクライミング・タイムを記録した選手の人数」で変化することです。仮に当初の参加選手数が16を超えていても、不正スタートなどで有効タイムを記録した選手がそれを下回った場合は、決勝ラウンドへの進出選手は8名（場合によっては4名……）になってしまいます。

「有効なクライミング・タイム」の定義は9.13にあります。

9.13 有効タイムは：

A) 関連する選手が以下を満たす場合に記録されるものとする。

- 1) 最上部の計時パッドもしくはスイッチを叩いた；かつ
- 2) タイマーを停止させた

但し、関連するレースでいずれかの選手が不正スタートを行った場合以外とする。

B) 関連する選手が以下を満たす場合には記録されないものとする。

- 1) 最上部の計時パッドもしくはスイッチを叩いたがタイマーが停止しなかった；
- 2) 墜落した；
- 3) クライミング・ウォールの両脇もしくは上端の縁を使用した；もしくは
- 4) スタート後に、身体のいずれかの部分が地面に触れた。

選手が規定通りにスタートし、アテンプトを完了したときのタイムで、途中で落ちたり、不正スタートをした場合以外のタイムということです（そもそも途中で落ちたとき、あるいは不正スタートをした場合はタイムが記録されません。墜落の場合はfall、不正スタートの場合はFSと表記されます）。

9.6 競技順：

A) 予選については、次のように決定されるものとする。

- 1) レーンAについては、無作為順とする。
- 2) レーンBについては、レーンAと順序は同様とし50%の人数——選手数が奇数の場合は切り捨てた

人数—のところで前後を入れ替える。

予選の競技順は、リードと同様にランダムで、全ての選手がクライミング・ウォールの 2 つのレーンを 1 回ずつ登りより速い方のタイムを比較して順位を決めます。9.6 A) 2)にあるように、B レーンでの競技順は A レーンの競技順の前半と後半を入れ替えたものとなります。これはリードの予選の競技順と同じです。

B) 決勝ラウンドの各ステージについては、付録 (Annex) 2 で定められたものとし、各レースの各レーンへの割り当ても同様とする。予選ラウンドで 2 名以上の同着の選手がいた場合、決勝ラウンドの第 1 ステージでのそれらの選手の競技順は無作為に決定するものとする。

決勝は勝ち抜き戦ですから、個々の選手の競技順ではなく対戦表となります。B) に記述のある「付録 (Annex) 2」の対戦表とは次のようなものです。

付録 (Annex) 2 レースとレーンの組合せ

16 選手

1/8 ステージ

1 A 予選 1 位
B 予選 16 位

2 A 予選 8 位
B 予選 9 位

3 A 予選 4 位
B 予選 13 位

4 A 予選 5 位
B 予選 12 位

5 A 予選 2 位
B 予選 15 位

6 A 予選 7 位
B 予選 10 位

7 A 予選 3 位
B 予選 14 位

8 A 予選 6 位
B 予選 11 位

1/4 ステージ

9 A レース 1 勝者
B レース 2 勝者

10 A レース 3 勝者
B レース 4 勝者

11 A レース 5 勝者
B レース 6 勝者

12 A レース 7 勝者
B レース 8 勝者

1/2 ステージ

13 A レース 9 勝者
B レース 10 勝者

14 A レース 11 勝者
B レース 12 勝者

ファイナル・ステージ

15 A レース 13 敗者
B レース 14 敗者

16 A レース 13 勝者
B レース 14 勝者

8 選手

1/4 ステージ

1	A 予選 1 位
	B 予選 8 位

2	A 予選 4 位
	B 予選 5 位

3	A 予選 2 位
	B 予選 7 位

4	A 予選 3 位
	B 予選 6 位

1/2 ステージ

5	A レース 1 勝者
	B レース 2 勝者

6	A レース 3 勝者
	B レース 4 勝者

ファイナル・ステージ

7	A レース 5 敗者
	B レース 6 敗者

8	A レース 5 勝者
	B レース 6 勝者

4 選手

1/2 ステージ

1	A 予選 1 位
	B 予選 4 位

2	A 予選 2 位
	B 予選 3 位

ファイナル・ステージ

3	A レース 1 敗者
	B レース 2 敗者

4	A レース 1 勝者
	B レース 2 勝者

決勝の最初のステージの対戦組合せは、ステージ数に関わらず予選通過者の内の 1 位 vs. 最下位、2 位 vs. 下から 2 番目……という風に強い選手と弱い選手を対戦させる形になります。その上で上記の表にある競技順（レースの順番）で対戦が行われます。基本的な考え方としては、予選で上位の選手を有利にする（1 位 vs 16 位、2 位 vs 15 位・・・）、レースの順番は様々なレベルのレースを取り混ぜて観客が飽きないような工夫をしています。

競技会の進行

9.7 プラクティス・ピリオドが設定されている場合、選手は各ルートで 1 回のプラクティス・ランを行う権利が与えられなければならない。選手は、不正スタートの場合、中止させられることはない。プラクティス・ピリオドは：

- A) 不正スタート音と計時備品のデモンストレーションを含むものとする。
- B) 予選ラウンドのプレ・ランの形式を取らねばならず、予選ラウンドに参加する資格を保有する各選手は、予選ラウンドの公表された競技順でアテンプトを行わねばならない。 Jury・プレジデントは、競技会特有の状況を考慮し、プラクティス・ピリオドの時間や形式を変更することができる。

スピード競技では、予選の前に原則プラクティス・タイムと呼ばれる試登の時間を設定します。プラクティス・タイムでは、各選手が各レーンを 1 回ずつ試登することができます。プラクティス・タイムの目的は、ルートの最終確認という意味合いもありますが、それよりもむしろ選手にとっては計時システムの「クセ」に慣れるための時間という位置付けです。これは、前述のように計時システムの仕様がメーカーによってかなり違うこと（スタート・パッドのサイズや厚さが異なる、スイッチ式 or タッチマット式……）が影響していると考えられます。

尚、プラクティス・タイムは必ず実施しなければならないものではありませんが、選手のためには可能な限り行った方がよいものですので、様々な条件下でもプラクティス・タイムを行うことができる権限を Jury・プレジデントに与えています。

9.7A) の「デモンストレーション」はほとんど行われていませんが、これはプラクティス・タイムで大抵 1 回は不正ス

タートが発生するからそれを確認しろ、ということのようです。

9.8 予選ラウンドでは：

- A) 各選手は、以下の場合を除き、各レーンで1回アテンプトを行うことができる
 - 1) 不正スタートやテクニカル・インシデントの結果、再競技が要求される場合、追加のアテンプトが認められるものとする；もしくは
 - 2) 各選手がコール・ゾーンへの呼出に応じなかった場合、それらの選手が関係するレースはそれらの選手を除いて実施しなければならない。
- B) 各選手は、両方のレーンでのアテンプトを完了するまで、ジューリ・プレジデントの指示の下に競技エリアに留まるものとする。
- C) 予選ラウンドのいずれかのレースにおいて不正スタートを行った選手は、予選ラウンドから脱落するものとし、それより以前に記録された有効タイムは失われるものとする。不正スタートを行っていない選手は、相手がいない状態で再競技を行うことができ、この再競技は次に予定されているレースの前に実施するものとする。

スピード競技は基本的に2人1組で競技を行いますが、予選に関してはそのペアの中での勝敗は順位付けに関係がないタイムレース形式を採用しています。

9.8 B) は、アイソレーションの概念がないスピードでは選手管理が難しいことからあえて競技エリアに留まるように規定しています。

C)にある「不正スタート」=false start はいわゆるフライングを指します。この定義は9.12にあります。

9.12 不正スタート

- A) いずれかのレースで、スターターが「Ready」と声をかけた後に：
 - 1) 片方の選手の反応時間が0.100秒未満の場合、その選手は不正スタートを行ったと記録するものとする；
 - 2) 両方の選手の反応時間が0.100秒未満の場合：
 - a) 最も反応時間が早い選手は不正スタートを行ったと記録するものとする；かつ
 - b) 両方の選手の反応時間が同じだった場合、関連するレースは再競技するものとし、不正スタートは記録されないものとする。
- B) 不正スタート発生後、計時システムによるリコール信号に加え、スターターは可能な限り速やかに「Stop」と声をかけるものとする。
- C) IFSCによって承認された自動計時システムによって記録された反応時間の妥当性に関して抗議を申し立てることはできない。

予選では選手は各レーン1回ずつアテンプトを行うことができますが、最初にトライするレーンと2回目にトライするレーンのどちらでも不正スタートを行った場合はその時点で失格となり、最下位となります。注意すべき点は、2回目にトライするレーンで不正スタートを行った場合、既にトライしたレーンで有効なタイムを得ていたとしてもその記録は取り消されるということです。

9.12 B) は、2回目の不正スタートで失格となっていた時代に、不正スタートを起こしていない選手がそのまま登り続けると再競技の際に不利になるために定められていると考えられます。

9.9 決勝ラウンドは：

- A) 複数の勝ち抜きレースで構成される一連のステージで実施され、いずれかのステージにおけるレースの勝者は次のステージに進出するものとする。ステージおよびレースの数は、決勝ラウンドの定員によって決定される。
- B) 決勝ラウンドのいずれかのレースにおいても、勝者は以下の通りに決定されるものとする：
 - 1) 両方の選手が有効タイムを記録した場合、より早い有効タイムを記録した選手。
 - 2) 片方の選手が不正スタートを行ったと決定された場合、もう片方の選手。
 - 3) 両方の選手が同じ有効タイムを記録した、あるいは有効タイムを記録しなかった場合（不正スタートが発生した場合を除く）：
 - a) より高い（より良い）予選順位の選手；あるいは
 - b) 両方の選手の予選順位が同じ場合、関係するレースは再競技するものとする。
 - 4) いずれかの選手が、コール・ゾーンでの呼出に応じなかった場合、他方の選手。
- C) 1/2 ファイナル進出者全員の紹介を準決勝の第一レースの前に実施するものとする。
- D) 1/2 ファイナルステージで敗退した選手は、3位と4位を分けるために“スモール・ファイナル”で競技を行うものとする。
- E) 1/2 ファイナルステージの勝者は、スモール・ファイナルの完了後、もしくは複数のカテゴリーが並行して競技を行う場合は全てのスモール・ファイナルの完了後に、1位と2位を分けるために“ビッグ・ファイナル”で競技を行うものとする。いずれかのビッグ・ファイナルで不正スタートが発生した場合、勝者は有効タイムを記録するために追加のアテンプトを行うものとする。
- F) 各選手は、敗退するまでジュリー・プレジデントの指示の下に競技エリアに留まるものとする。

9.9 C) の出場選手紹介はリード、ボルダーでも規定されていますが、スピードの場合は決勝ラウンド進出者全員ではなく、スモール・ファイナルの前に行うことになっています。ちなみに、スピードの決勝ラウンドは、16人進出の場合、1/8 ファイナル、1/4 ファイナル、1/2 ファイナル、ファイナル（スモール・ファイナル＝3位決定戦、ビッグ・ファイナル＝1位、2位を決定する本当の決勝）の4つのステージで構成されています。また、決勝は通常男女交互に進めていきますので、選手紹介では、3位決定戦の前に男女それぞれの3位決定戦と決勝に進出する合計8名の紹介をすることになります。

決勝ラウンドで不正スタートを行った場合は、決勝ラウンド全体の最下位ではなく、不正スタートを行ったステージでの最下位になります。

なお2017年までは「不正スタートを行わなかった選手は、当該ステージでそのアテンプトを完了しなければならない」という規定がありましたが、1人で登らせるのはショーとしては全く見栄えがしませんし、その適用が統一されなかったため、2018年より再レースはビッグ・ファイナルのみとなりました。

決勝ラウンドでは原則として同着の選手は再競技を行います。両方の選手が不正スタートを行った場合は反応時間の長い選手を勝者とします（9.12 A) 2) a)）。計時システムによっては反応時間が表示されないものもあるので注意が必要です。

クライミング中の規定

9.10 全てのレースは、指名されたスターターによる明瞭に聞き取れる合図音によって開始されるものとし、スターターは IFSC オフィシャルでないものとする。スターターは、各選手からは見えない位置にいるものとする。合図音の音源は、全ての選手から等距離で、可能な限り近くに設置しなければならない。

スターターは特に規定はありませんが、通常は国内審判資格保有者が行います。IFSC 競技役員、すなわち IFSC ジャッジやジュリー・プレジデントはスターターを兼任することはできません。スターターは選手から見えない位置にいないとありますが、これは選手がスタート・ポジションに入ったときに見えない位置という意味で、どの時点でも見えない位置にいないとしないということではありません。スターターの位置は、多くの場合ウォール正面中央から 5m 程度離れた両レーンと時間表示が見渡せる位置としていますが、最近では見栄えの問題からウォールの前にできる限り人や物を置かない傾向がありますので、ウォールに向かって右側に置く場合もあります。

9.11 各レースは共通のスタート方法を用いるものとする：

- A) ルートの取付きに呼び出されたら、各選手は：
- 1) 呼び出されてから 10 秒以内に、スタート・パッドを自分のスタート・ポジションに適した位置に置かなければならない。
 - 2) ビレイヤーに身体を向け、ビレイヤーは以下の事項を確認するものとする。
 - a) 選手のハーネスが適切に着用されていること；かつ
 - b) 選手のハーネスが安全に自動ビレイシステムまたはトップロープに接続されていること。
 - 3) スターターの指示に従い、壁の前方 2m 以内の待機位置に、壁に背を向けて入ること。

選手はコール・ゾーンから送り出された後、自分がトライするレーンの前に到着したらまずスターティング・パッドの位置を調節します。このときに選手はホールドに触ったり足を掛けることができます。10 秒以内に調節したら、各レーンの前方 2m 以内にテープで囲われた待機位置にウォールに背を向けて立ちます。そこでビレイヤーにロープもしくはオート・ビレイシステムを装着してもらいます。規定では ii.→iii.の順になっていますが、現状では同時に行われているイメージです。「スターターの指示」とありますが、何か声をかけて指示することも基本的にないので、選手にはこの一連の流れは必ず教育した方がいいでしょう。

- B) 「At your marks」の指示で、各選手は遅れを取ることなく、片足をスターティング・パッドに置き、両手と片足を任意のスターティング・ホールドに置くこと。
- C) 全ての選手がスターティング・ポジションで静止したら、スターターは「Ready」と声をかけ、それに続いてただちに計時システムを始動するものとする。
- D) いかなる理由であれ、「At your marks」の指示の後、そしてスターターが「Ready」と声をかける前に：
- 1) スターターがレースを開始できないと判断した場合；もしくは
 - 2) 選手が、片手を挙げてスタートする準備ができていない旨を伝えた場合

スターターは全選手に対し待機位置に戻るよう指示するものとする。

- E) 選手が(A)もしくは(B)に従わない、もしくは他の選手を妨害する行動をとった場合、スターターは全選手に対し待機位置に戻るよう指示するものとする。ジュリー・プレジデントは、問題のあった選手に警告（イエローカード）を与えることができる。

いわゆる「位置について」は「At your marks」というコールになります。陸上競技では、「On your marks」ですが、スポーツクライミングでは「At your marks (アト・ユア・マークス)」となります。このコールの後、選手は4秒以内に両手と片足を任意のスターティング・ホールドに、片足をスターティング・パッドに載せなければなりません。「任意のスターティング・ホールド」ですので、片足をスターティング・パッドに置いた状態から届く範囲のホールドであればどれを使っても構いません。

「用意」にあたるコールが「Ready (レディ)」です。2011年までは、「Ready」の後に「Attention!」というコールをしてから計時システムを始動していました。また、2017年にはそれまでスタート音が1回のピープ音だったものを3回のピープ音に変更されました。1回のピープ音の場合、スターターが「Ready」のコールの後システムのスタートスイッチを押した瞬間にスタート音が鳴る仕組みになっており、この「Ready」からスタート音までは1秒から2秒空けると定められていましたが、どうしてもこの「間」が大会中に一定に保たれないケースが発生します。これによって不正スタートが起きることも想定されるため、2017年からは不正スタートの一発失格と抱き合わせで、大会中はもちろんのことすべての国際大会でスタート音のタイミングが統一されることになりました。

D) 1) は、例えば選手がスターティング・ポジションに入ってから計時システムのトラブルが起きた場合に、選手の負担にならないよう待機位置に戻るようスターターが判断してよいという規定です。

以前は、片方のレーンでは選手がスターティング・ポジションに入っているにもかかわらず、もう片方のレーンの選手はもたもたしているという状況がよくみられたのですが（相手のペースを乱す作戦でもあったようですが）、それに対しスムーズに競技を進行させるための規定が E) になります。

9.14 不正スタートの発生後を除き、選手は各ルートでのアテンプトの間に最低5分の休憩時間が与えられる。

予選ラウンドでは最初のレーンでのアテンプト終了から次のレーンでのアテンプト開始までが5分未満となることは、よほど参加者が少ない限りあり得ませんが、意識しておくべき点でしょう。決勝ラウンドでは、関係するとすれば1/4ファイナル以降です。

判定及び評価

9.15 各選手のクライミング・タイムは、スタート信号から選手のアテンプトの完了までの期間と定義するものとする。計時システムは：

- A) 各選手のクライミング・タイムを別々に記録し表示するものとする。
- B) 最低でも1/1000秒の精度でのタイムの計測が可能であるものとする：
 - 1) タイムは順位付けのために1/1000秒単位まで記録するものとする；
 - 2) タイムは1/100秒単位に切り捨てて表示するものとする。

リードの場合、選手のクライミング・タイムは身体のすべてが地面から離れたときから計測を開始しますが、スピードの場合はスタート音から計り始めます。2017年までは公式な国際大会でも手動計時が許容されていましたが、2018年から自動計時のみになりました。

IFSCが公認する大会で用いる計時システムは、IFSCから認証を受けたものでなくてはなりません。全世界で8社がライセンスを保有しています。しかしながら、ライセンスの発行基準が曖昧で、単にこの9.15を満たしていればよいようです。そのため、現状では計器の仕様がメーカーによってかなり異なっています。

9.16 有効タイムは、選手がこれらの規則に従ってアテンプトを完了した場合に記録されるものとする。

アテンプトの「完了」は、他種目でも完登のことですから、スピードでは先の 9.13 A) 1) 「最上部の計時パッドもしくはスイッチを叩いた；かつ 2) タイマーを停止させた」の 2 つを満たした時に成立し有効タイムも記録されます。

順位付け

9.17 予選順位

- A) 選手は以下の方法で順位づけられるものとする：
- 1) 第一に、最低でも 1 つの有効タイムを保有する全選手は：
 - a) 最速タイムの昇順；かつ
 - b) 2 名以上の選手の最速タイムが同じ場合、それらの選手のセカンド・タイムの昇順（有効なセカンド・タイムを保有する選手は、保有しない選手よりも上に順位づけられる）；かつ
 - 2) 第二に、有効な予選タイムを保有しない全選手.
- B) (A)の順位決定方法の適用後、同着があつて決勝ラウンドへの定員を超える場合、同着の選手は関連する同着が解消されるまでレーン A で再競技を行うものとする。これらのアテンプトで記録されたタイムは、どの選手が決勝へ進出するかの決定のみに使用され、他の目的には使用されないものとする。

予選の成績は 2 回のトライのうち、より速いタイムで決定されます。どちらかのトライで不正スタートをしなければタイムは残りますので、極端な話ですが最初のレーンでかなりいいタイムが出たら 2 番目のレーンは手を抜いても（フォールしても or 登らなくても）良いわけです。

他種目では次ラウンド定員を同着で超過する場合は全員が進出できましたが、スピードの決勝ラウンド勝ち抜きのため人数が 2 のべき乗でなければなりません（4, 8, 16 のいずれか）。そこで B) にあるように同着の選手は再競技で決着をつけます。対戦にしないのは、レーンの違いによる差を考慮したか、3 人以上の同着が出た場合を考慮したかのいずれか（両方？）でしょう。

9.18 決勝及び最終順位

- A) 選手は、競技を行った最後のステージから順に決勝ラウンドで順位づけられるものとする：
- 1) 第一に、各ステージでのレースの勝者；かつ
 - 2) 第二に、各ステージで敗退した選手は、そのステージの時間記録で順位づけられる（そのステージの有効な時間記録がなく最下位となった選手、及び同着の敗退した選手間の順位は、先立つステージ（必要があればさらに前のラウンド及び予選ラウンド）の時間記録の比較で順位づけられる）；
- B) 最終順位は、以下の基準で決定される：
- 1) 第一に、決勝順位を保有する選手は、その順序；かつ
 - 2) 第二に、決勝順位を保有しない選手は、予選順位の順序.
- C) 決勝ラウンドがいずれかのステージで中止された場合、競技会は終了したものとみなされ、最後に完了したステージ後の総合順位が競技会の総合順位となり、最後に完了したステージのレースの勝者間の順位は、それぞれの時間記録に基づいて決定される。

準決勝、スモール・ファイナル（3位決定戦）、ビッグ・ファイナル（決勝）以外のステージでの敗者は、そのステージの敗者の中でタイムを基に順位付けを行います。敗者の中で複数名タイムが残らない選手が出た場合（fall, FS など）は、その前のステージもしくは予選ラウンドまでカウントバックします。

テクニカル・インシデントと抗議

9.19 テクニカル・インシデント及び抗議の判断には、公式ビデオ記録のみ、かつジャーリ・プレジデントの裁量によって IFSC 放送ビデオ記録を使用するものとする。公式ビデオ記録は最低でも以下を記録しなければならない：

- A) 両方のレーンのスタート・ポジション；
- B) 両方のレーンの最上部の計時パッドもしくはスイッチ；かつ
- C) 各レースの選手の各ペアのアテンプト

スピードの場合のビデオ記録もボルダーの場合と同様、選手の動きを追うのではなくポジションは固定して撮りっぱなしになります。

スピード競技のビデオは、常に一つの画面に両レーンが入るように撮影します。1台でスターティング・ポジションを含んだウォールの下から3分の2程度、もう1台でゴール・パッド/スイッチ含んだウォール上から3分の2程度を撮影すると、ちょうどウォールの中央部分は2台でオーバーラップするようになります。決してリード競技のビデオのように選手を追いかけるように撮影しないでください。できれば、いずれかのビデオカメラでタイム表示ディスプレイも映るようにしておくと、タイムの記録忘れが発生した際に確認できるので良いでしょう。

9.20 選手もしくはチーム・オフィシャルが、テクニカル・インシデントが発生したとみなした場合、次のレースの開始までにジャーリ・プレジデントにその旨を申し出なければならない。

9.21 計時システムの性能に関連するテクニカル・インシデントを主張することは、明白な誤作動もしくは系統誤差に関する場合にのみ可能である。

9.22 ジャーリ・プレジデントは、以下に従ってテクニカル・インシデントの発生の有無を決定するものとする：

- A) 決定のために、ジャーリ・プレジデントは必ず：
 - 1) 公式ビデオ記録を確認するものとする；
 - 2) システムの動作確認を要求するものとする；
 - 3) ルートセッターに対し、関連するルートに登り、最上部のパッドあるいはスイッチを叩くよう要求するものとする。
- B) テクニカル・インシデントが：
 - 1) 解決され、単一のレースに影響したとみなされた場合、直接的にそのテクニカル・インシデントの影響を受けた選手は再競技を行うものとする；もしくは
 - 2) 解決されず、関連するステージの全選手に影響したとみなされた場合、ジャーリ・プレジデントは：
 - a) 影響を受けたステージ以降を中止する；もしくは
 - b) 当該ステージの結果を破棄し、再競技を命ずるものとする。

スピードはホールドの位置が固定で回り止めも確実に打たれていますので、リードやボルダリングと比較してホールドの破損——特にフットホールド——はありえますが、回転によるテクニカル・インシデントはほとんど発生しません。その代わりに、計時システムのトラブルは非常に厄介です。トラブルが修復可能であればまだしも、9.22B) 2) b)にある

ように、大会そのものが途中終了という事もありうるわけです。必ず事前に動作確認をしっかりとすることが肝要です。

9.23 抗議

A) 以下の判定に関する抗議は次のレースのスタートまでに申し立てねばならない。

- 1) いずれかのレースの選手のアテンプト；もしくは
- 2) 決勝ラウンドのいずれかのレースの成績

次のレースは、抗議の処理が終わるまで開始しないものとする。このような抗議は、口頭で申し立てることができ、抗議供託金は要求されない。

B) 公表された成績もしくは選手の順位に関する抗議は、文書によって、かつ：

- 1) 予選ラウンドに関しては、公式成績の公表後 5 分以内に申し立てねばならない；もしくは
- 2) 決勝ラウンドに関しては、関連する成績もしくは順位の公表時に申し立てねばならない。

レースそのものに関する抗議はレース直後のみ認められると考えて良いでしょう。

B) は他種目の場合と同様の記述です。

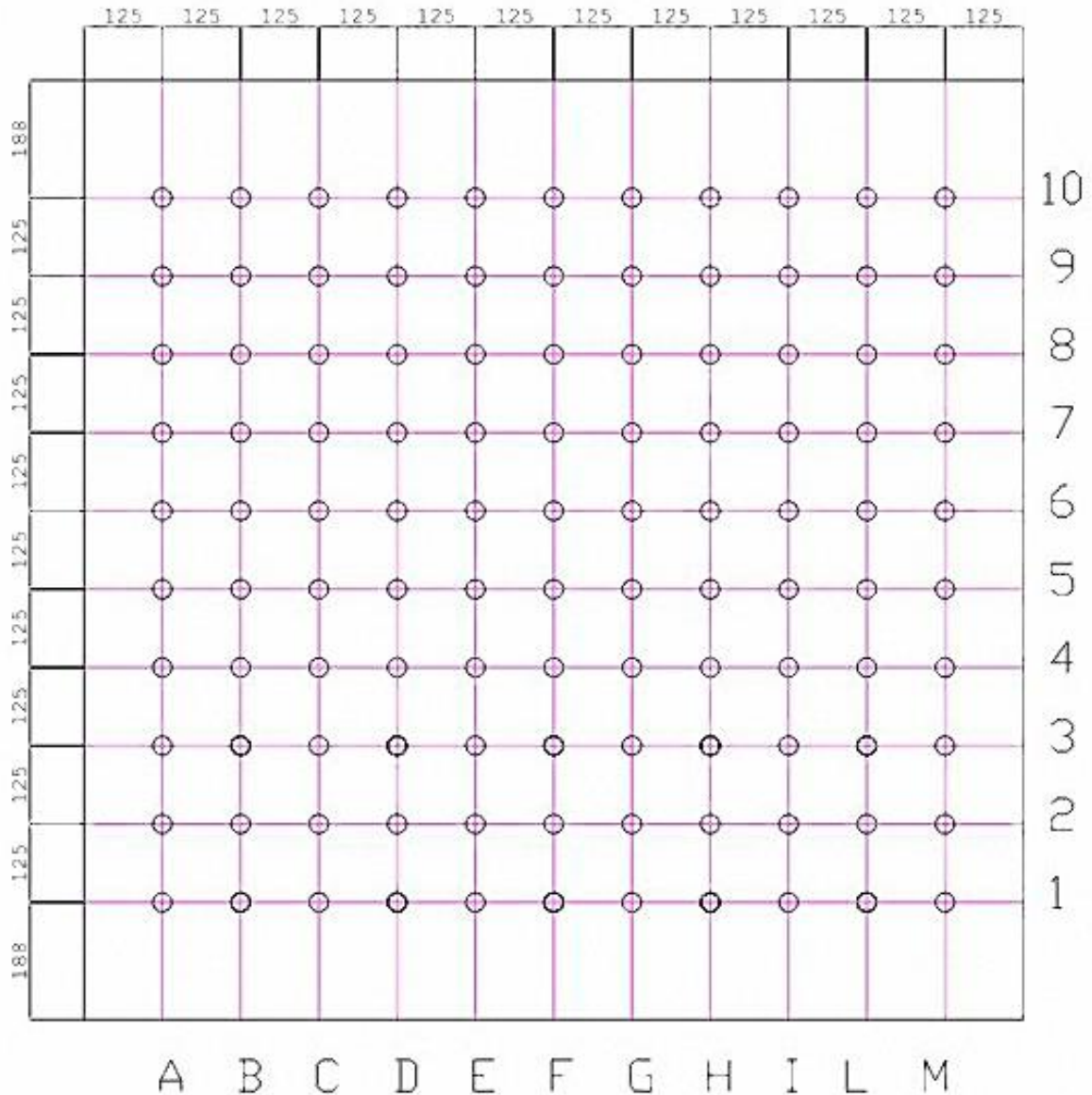
※ このスピードの規定の後に「チーム・スピード」に関する規定がありますが、「IFSC は、チーム・スピード競技会に IFSC ルール 2018 (v1.5)を適用することを認めることができる。」とあるのみです。

15m 競技用レーン

スピードは、特に決勝では2人の選手が対戦し、先着した方が次のステージに進んでいくという競技方式ですので、1レーンだけでは成り立ちません。ですから、「最低でも2つ」レーンが必要となるわけです。幅1.5mのパネル2枚×10段で1レーンを構成しています。



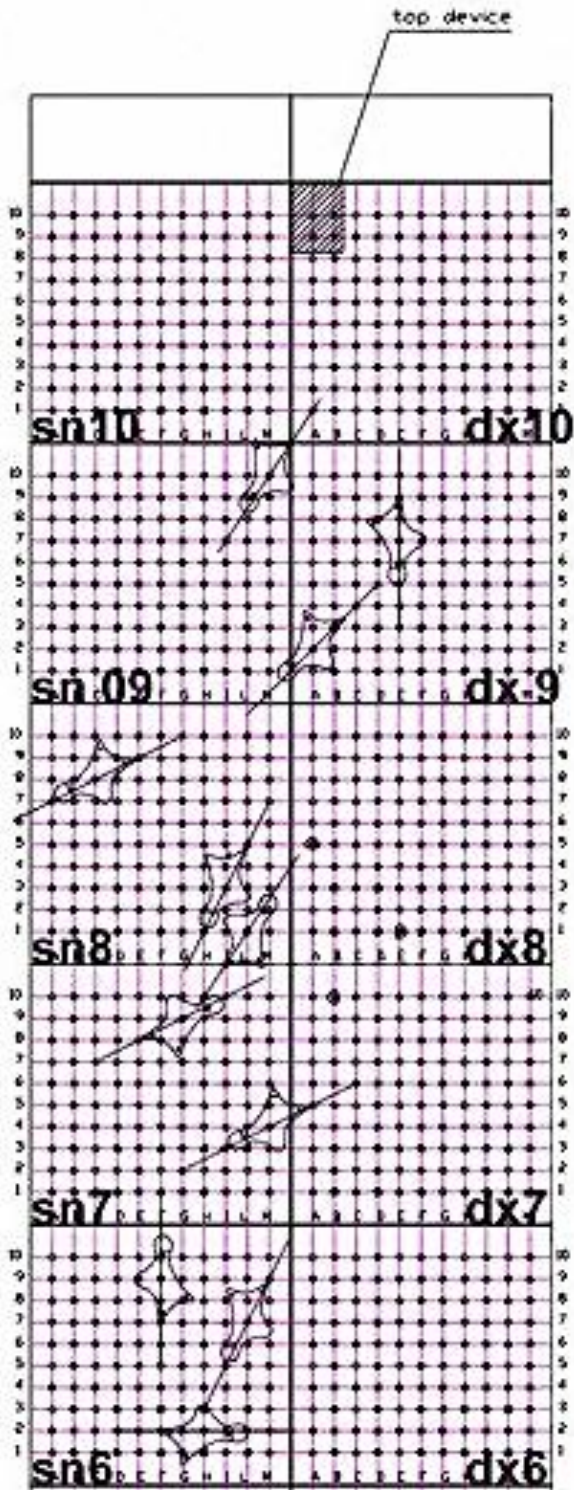
パネルのクライミング面の M10 のホールド取り付け穴の配置



パネルに取付けられるホールドは、前述のようにハンドホールドとフットホールドの 2 種類で、それらの規格もすべて定められていますので、違う種類のホールドで代用するといったことはできません。したがって、スピード競技会を実施する際には予備用のホールドを必ず準備しておく必要があります。ハンドホールドにはすべて 3 次元バーコードが取り付けられており、シリアルナンバーや製造元が記録されています。2012 年までは IFSC 公認スピードホールドメーカーが複数ありましたが、メーカーによって完成度にばらつきが出たようで、2013 年よりライセンスは 1 社のみが付与されています。このライセンスは期間が 2 年で、昨年までは PlanetRock 社が保有していましたが今年から Volx 社に変わりました。他のメーカー経由でも購入できますが、それはライセンス保有メーカーから供給されたものと思われます。

ルート図 (ホールド配置)

上半部



下半部

